NO.9
2025年2月
編集長：中里美郷

長野反核医療者の会 会報

目次

小山美砂さん　カザフスタン取材報告会
コミュニティ・オーガナイジング報告会
祝！被団協ノーベル平和賞
おたよりコーナー

長友会　前座明司さんに
ご挨拶していただきました

ヒバクシャの願いをつなぐプロジェクト
近藤拓也さんによる活動紹介

いっぽプロジェクトのひろしさん
いっぽの歌を会場で生演奏

小山美砂さん カザフスタン報告会・座談会を開催

12月15日(日)広島在住のフリージャーナリスト小山美砂さんとカクワカ広島（核政策を知りたい広島若者有権者の会）の田中美穂さんをゲストにお招きし、「カザフスタンのヒバクシャを取材して　私たちがすすめる核兵器禁止条約」をABC for Peace（いっぽプロジェクト）との共催で開催しました。

小山さんはカザフスタンを訪れ、旧ソ連による核実験場跡地や、核実験による放射能の影響を受けた住民、現地の医療施設などを取材されています。カザフスタンは2025年3月にニューヨークの国連本部で開催される核兵器禁止条約第3回締約国会議の議長国となることが決まっています。

企画の前半は小山さんにカザフスタンの取材報告をしていただき、後半は2023年12月に開催された核兵器禁止条約第2回締約国会議に参加した当会メンバーの光武鮎さん、河野絵理子さんと、小山美砂さんとの座談会をおこないました。座談会のファシリテーターは田中さんに務めていただきました。

核廃絶の灯火、ヒバクシャ補償の国際的協調から

カザフスタン取材報告会は会場26人、オンライン24人、計50人の方にご参加いただきました。
参加した当会メンバーの松久凌大さん（長野県出身・秋田大学医学部4年生）に感想を寄稿してもらいました。

「体験を話すと、当時に引き戻される気がしてどっと疲れるんじゃ。ピカドンで済まされてたまるか。家は押しつぶされ、そこからはい出し、防空壕で草を食べて生き永らえた。辛い体験を語るのは、未来を生きる人のため」

「黒い雨の物語ってね、貧乏との闘いでもある。病気で十分働けなくなって、お金が残るはずがない。国が勝手に戦争して、病気だらけの人生を放っておいた。黒い雨で被ばくをして病気のひどい人は、死ぬ道しかないような気がする」

ジャーナリストの小山さんが伝える言葉は、ヒバクシャの人生をかけた証言だ。核被害者への支援は、救済と核廃絶の両面で必要とされる。そして何より、これらの被害が戦争によってもたらされたことを、非人道性を訴える力で伝えていかねばならない。

今年3月、カザフスタンが議長国となる核兵器禁止条約第3回締約国会議（3MSP）が開催される。世界最大の核実験場を持っていたこの国の被ばく者は、今何を訴えているのか。

小山さんがカザフスタンで目の当たりにしたのは、最後の核実験から30年経った今も続く核被害と、核廃絶を訴えながら自国の被ばく者への補償が手薄な現実だった。

被害の深刻なサルジャール村では、生活環境が少しずつ改善される一方、ヒバクシャのクサインさんは語る。

「首つり自殺する若者が多い。政府の対応はアンフェアです。薬代くらい支援してほしい。」
若者の自殺は「ポリゴン（核実験場）病」と呼ばれ、恐れられているが、政府の対応は変わらない。

また、核実験場の近くで育ち、幼いころから皮膚病を患っていたドクジャンさんはこう語る。
「佐々木禎子さんの折り鶴の話を知り、日本が可哀そうだと思っていました。でも、隠されていたので、自分たちが実験場に住み、ヒバクシャであることを知りませんでした。」
隠されていた被ばくの実態に気づいたときの衝撃は計り知れない。

カザフスタンの被ばく者が訴えるのは、「補償・支援を」という切実な声だ。昨年ノーベル平和賞を受賞した日本被団協の田中熙巳さんも、日本政府が被ばく者に補償していないことを授賞式で訴えた。

3MSPでは、核被害者への包括的な補償のため、国際信託基金の創設が議論される。核被害の救済と核兵器廃絶運動、その両面からの国際的連帯が、真の補償へとつながるはずだ。

前回会議では、市民運動の力が条約推進の鍵となることが確認された。多様な団体と国際的に連携し、一歩一歩進めていきたい。繋がり続ける、繋いでいく。

後半の座談会では「私たちがすすめる核兵器禁止条約」と題し、小山さん・田中さんと第2回締約国会議に参加した当会とABC for Peaceのメンバーである河野さん・光武さんが「ヒバクシャ中心に条約をつくっていくには？」「日本の加害に向き合うことと核兵器廃絶」「今日の聞き手は明日の語り手。継承するってなんだろう」などなど、さまざまなテーマについて語り合いました。

座談会はYouTubeで視聴できますので、こちらのQRコードから是非ご覧ください！

コミュニティ・オーガナイジング
報告・実践会

2024年6月に、全国労働組合総連合主催で行われた「2024年ゆにきゃんふるワークショップ（以下ゆにきゃん）」に、長野反核医療者の会から4名が参加しました。今回の報告・実践会では、ゆにきゃんで学んだコミュニティ・オーガナイジング（以下CO）のエッセンスを紹介しながら、長野反核医療者の会としての課題を確認。目標を立て、課題解決に向けたチーム作りを行いました。

COは、アメリカで黒人初のバラク・オバマ大統領を誕生させた社会運動のノウハウです。アメリカの公民権運動、日本の百姓一揆のように、当事者自らが課題解決や、社会を変えるために行動を起こしてきましたが、マーシャル・ガンツ博士がそれらを方法論として体系的にまとめあげました。

2025年1月12日、8名の参加者が松本に集合。結成以来、定期総会以外でははじめてメンバーが対面で、長野反核医療者の会について議論をする場になりました。まずは、平和活動に取り組む8名それぞれの価値観を、対話（コーチング）で深堀していきました。なぜ平和活動に取り組んでいるのか、過去のどんな困難が今の活動につながっているのか、価値観を言語化すると何か…。一人ひとりの価値観の重なり合う部分をまとめて、チームの価値観を確認していきました。どんな社会でありたいか、どんな組織でありたいか。目標実現のためにチームでできることは何か、そこに向けて個人が貢献できることは何か…。ゆにきゃんへ参加した4名が、チームコーチとして、チームの気づきや学び、チーム作りをサポート。5時間弱をかけて、ひとつのチームが発足しました。

作成したチーム名や、チームの目標、今後取り組みたいことは、4月29日の定期総会にて皆さまへ報告させていただきます。定期総会では、目標達成に向けて、ぜひ皆さまからも多様なアイディアを募集したいと思います。多くの皆様のご参加をお待ちしております。（丸橋郁弥：事務局メンバー）

COに興味を持った方、関連書籍をぜひチェックしてみてください！

祝！日本被団協ノーベル平和賞受賞

2024年のノーベル平和賞は、日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）に贈られました。受賞が発表された10月11日、被団協の方々が涙して喜んでおられる姿が各種メディアで報道されました。わたしが核兵器禁止条約の第２回締約国会議でご一緒した被爆者の方々の姿もあり、皆さんがニューヨークで核廃絶を訴えていた姿や私たちを励ましてくださった言葉も思い出し、もらい泣きしてしまいました。

授賞式で、日本被団協代表委員の田中熙巳さんは、「日本政府は、一貫して国家補償を拒んでいる。被爆者への償いを全くしていない」と言葉を繰り返して強調されました。被団協は、「国家補償というのは、国が国民に対し、もう戦争はしない、ふたたび被爆者をつくらないと約束すること」としています。私たち次世代の人々の命と権利をまもるために、償いを求めて行動しているという姿勢に、改めて敬意を表します。

ノーベル平和賞選考委員長のヨルゲン・フリードネスさんは、「被爆者の思いを引き継ぐのは、世界のすべての人間の責任」と発言されました。この平和賞を無駄にせず、核廃絶を現実のものにできるかどうかは、私たち一人ひとりの行動にかかっています。（河野絵理子：事務局メンバー）

ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会
栗原淑江さん記念講演決定！

4月29日（火祝）の第４回定期総会では、記念講演として、NPO法人ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会の栗原淑江さんをお呼びします。授賞式で田中熙巳さんが「次世代の継承の大きな参考になる取り組み」として紹介された会です！

被爆者と共に長年活動してこられた立場から、日本被団協のノーベル平和賞受賞への思いや、原爆被害者の基本要求、被爆者運動の歴史についてなど、ご講演いただきます。また、リレートークも予定しています。被爆者の「願い」をどう継承するのか考える機会にしたいと思います。ぜひご参加ください。

長野反核医療者の会 第４回定期総会・記念講演
「被爆者とともに歩んで～ふたたび被爆者をつくらないために～」
日時：2025年4月29日(火祝)13:00～
会場：松本市勤労者福祉センター3-3（WEB併用）

お便りコーナー

長野反核医療者の会が結成してそろそろ４年が経とうとしています。事務局メンバーが中心となり、様々な取り組みをしてきました。一方で、会員の皆さま同士の交流の場がなかなかもてないことに悩んでおります。つきましては、会員の皆さまの想いや経験を、「お便り」としてぜひお寄せいただけないでしょうか。次号以降の会報でご紹介させていただきます。

✉**送付先**　info@panw-nagano.com
①お名前　②匿名掲載か否か、またはペンネーム　③勤務先　④メッセージ
（会報の記事の感想、反核平和について思うこと、最近の出来事、おすすめ書籍などご自由に）